

## 「みんなのしつと」

伊藤比呂美

ええ。今年は夏が、長うございましたな。いつまでたっても「お暑うございます」しきやいわないで、以前まには、秋には秋の、冬には冬の、挨拶のしかたがあったものを、すっかり忘れちゃいました。

むかしはね、いや、昔たつてきようりゆうのいた頃のことじゃないんだよ、つい先だつてなんだけどもね。おばあちゃんが小さい頃には、ふゆというものがあつてね、きたかせというものが吹いてね、しもというものがおりてね、そこで、「さむい」てえ、え？ わかんない？ ええなんといたらいいかな、ほら冷蔵庫にながーいこと入つてるとえと感じるんだけど、え？ 入つたことない？ そりやそうだね、肉や卵じゃないんだものね。ええと、ほれ、クーラーの効いた部屋ん中でかき氷を三杯くらい食べてごらん、つべたーくなって歯の根ががたがた合わさんなくなる、え？ 下痢もする？ ああそうだね、そうだけでもね、今いつてんのはそっちじゃないんだよ、いいから黙つて聞きな、かき氷食べなくつてもつべたくなることがあつたの、昔は。氷も食べてないのに空気がしとりでにつべたーくなつてきてね、おててやおみみがつべたーくなつてきてね、え？ そうだよ、クーラーは入ってないんだよ、うう、わかんない？ ったくどうしようもないね、今どきの子どもは、「さむい」ってことばア知らないんだから、なんでことになつてしまいます。

ええ、この温暖化の、しゃくねつの苦しみに、思い出すが、「嫉妬」というもの。

これア「待つ」というのととても似ておりました、ええ、ときどきどつちがどつちだか、わかんなくりますね。待つてるとえと、いらいらして、いらいらしてエるうちに疑心暗鬼にな

って、あることないこといろいろと考えつめたあげくに、妄想がふくれあがって嫉妬に狂う…

…。

あれは、辛うございます。

「ちよいと、しろみさん、いる？」とやってきたのが大家さん。六十代後半の独身女です。

「あら大家さんおかえんなさい、海外旅行どうでした？ 豪勢に、まあ、店子たなごが家賃ためこんでるのによく行かれた……」

「あんた以外はみんなちゃんと払ってくれてるから行かれたんだ。今日という今日はちゃんと払ってもらおうよ。だけどその前にちよっとこれ見ておくれよ。二週間うちをあけて、帰ってみたらこんなFAXが入ってた」

見れば、大きな、書きなぐりの字で、

「某さん、平和な家庭を壊さないでください。うちには引きこもりの息子もいます。メールも電話もしないでください。X」とある。

「某さんって？」

「あたしだよ」

「あらやだ、大家さんにも名前があっただんですか」

「生まれたときは大家じゃなかったから、親がつけてくれた」

「だけど大家さん、あなた、人も殺さぬ顔しとをして裏じゃそうとう……」

「しろみさん、それをいうなら『虫』。人を殺したらたいへんだ。でもあたしにやまったく身に覚えがない」

「そりゃ……あつたら怖いよ」

「なんだって？」

「いえ。大家さん、Xという人に心当たりは？」

「ある」

「……やっぱり怖いよ」

「高校のときの同級生。その頃はあたしのことを好きだったらしいんだけどね。けどもう五十年も会ってないしひょんなことからメールやりとりしたのも一年前ですよ。そのときは、近くの町まで来るから会いたっていつてきたけど、忙しいからって断った」

「セックスとかもしてないと」

「会ってないんだから。それで、最初のFAXが某月某日の夜に来てね、五分もしないうちに二枚目のFAXが来てるんだよ。それからまた五分もしないうちに三枚目、それからまた何日かして四枚目と五枚目が」

「どれ。ことわざは知らなかったってあたしや文章のプロですから。うーむ。文面からいったら、Xの奥さん」

「やっぱり」

「そう。見るところ同級生のXくんは、若い頃の婚期を逃し、四十近くなってから若い女と結婚しましたね。今、妻は五十代半ば。閉経したばかり。セックスはここ数年間遠まどおになって、今はもう一年以上やってません。子どもは二人。姉は就職はしてるけどまだ男つ気がない。弟は二十代半ばになんなんとし、引きこもり歴十何年、一時期は家庭内暴力もあったけど今は少しおさまっているんですな。その夜、その人はしとりぼっち、夫は帰って来なくて、娘は残業、息子は二階でしきこもってェた……。しとりでえびせんかなんか食べてたんだけど、疑念と嫉妬がふつふつと湧いて出て、ふくらんで、とめらいなくなつて、とうとう電話しちゃつたと。ところが大家さんは旅行中。留守電も設定してなかった。大家め、居留守を使つていやがるとこの人は激高して、一枚目のFAXをととととと（送信する音ですよ）。びー（送信しおわつた

音ですよ)、しばらく肩で息を吐いて気持ちをおさめようとしてみたがおさまらず、ついえびせんに手を伸ばしてしゃくしゃく食べてるうちに、なおも嫉妬と怒りがぐつぐつと、それで二枚目のFAXをととととと、ぴー。それでもってえびせんを、しゃくしゃくしゃく、しばらくして三枚目を、ととととと、ぴー、しゃくしゃくしゃく、その間息子は二階でコンピュータの画面をみつめて憑かれたようにゲームをやっけてる……」

「見てきたようなことをいつてるねエ」

「でもねえ、なんか気の毒じゃありません？ 十分間に三枚もこんなFAXを送ってくるんですよ、よっぽど追いつめられてたにちがいない」

「そうなんだよ、あたしもそこが気になってね。そんな思いをどこかで一人の女がしてるってこと。あたしだって経験がないわけじゃない。むかアし、なんだかんだあつてさ。もんもんとした。いてもたってもいらんようなこと。こんなことはさすがにしなかったけど。まあ似たようなことを、さんさん、さんさんやってきたよ」

「あたしは『こんなこと』もさんさんしましたよ、みんなするんですよ、しなかったらおとなの女になれないんです」

「あんたもたまには、いいことじゃないかねえ」

「ふふ、だからお家賃待って」

「それは待てない。でもね、だからこそ、この人がどんなに辛い思いしてるか、あたしはよくわかってるつもりだ。いっそ『あなたの思い過ぎしです、なんにもありませんよ』って、返事を書いてやったらどうだろう」

「信じやしませんよ、向こうは疑心暗鬼にかられてわけがわからなくなってるんですから。次にこの人がもんもんとして、耐えきれなくなつて大家さんに電話してきたとき、誠心誠意の受け答えをしてあげるより他にないんじゃないですかねえ。声を聞きゃあ少しは安まりますから。」

ねえ？ 古今東西の文学を見ても、こういう人はいっぱいいますよ。嫉妬で男は相手を殺す。

ところが嫉妬した女は、罪を憎んで男を憎まずッ、しかし第三の女を恨みぬく。ね？ 六条御

息所やすんじしろが呪い殺したのも光源氏じゃなくて、その妻の葵あおいの上、メディアが焼き殺したのもイア

ソンじゃなくて、その新妻のなんとかいう女。ね？ ありました、ありました、最近の日本でも、女が、不倫相手の男の家につけて、子どもが何人も焼け死んだてえことが。肝心の男はいないときだったんですよ。それから、女が、夫の不倫相手をストーカーして、あげくに車でしいちやったこともありました。ええ、このXの奥さんも、今頃は、うう、夫をたぶらかしたにつつき大家アア、恨みはらさで、おかりようかア」

大家さん、怖くなって、家賃のことも忘れて帰かっちゃった。

大家さんが帰ったら、待ってましたとばかりに相談のメールがコンピュータの中にとどいてました。大家さんの話とシンクロを、するともなくしてエるような、切ない相談でありました。

「しろみさん、辛くてたまりません。このごろ私の彼氏に女ができたようです。しかもその女には夫も子どももいるようです。もともと私たちは不倫ですが、もう五年もつきあっています。

私のことは彼の奥さんに知れていません。新しい女のことを聞き出そうとしても、何にもないの一点張りです。でも間違いないと思うのです。どうにかして相手の家庭と彼氏の奥さんに、

このことをバラしてやりたい」(三十九歳)

まとめますと、この相談者であるA女は独身で、その愛人は、妻帯者B男。このたびB男が、A女との関係はそのまま、家庭持ちのC女と関係を持った(らしい)。それがA女には耐えがたい。その長文のメールをつらつら読むと、A女はB男との関係に、そろそろ限界を感じている。それでもやめられない。嫉妬するのを、やめられない。

「なぜわたしは、こんなに嫉妬で苦しむんでしょうか。嫉妬しないですめばしたくないんです。

でも嫉妬するのをやめられませんか」とこの人は血の出るようなことばを書きつけてきた。

そしてね、この人やXの奥さんだけじゃないン。おんなしような相談が、何度も、何度もあつたしンところには送られてきました。みんな、嫉妬で、のたうちまわつてエる。

「人目を忍んで同じ課の既婚男性とつきあっています。奥さまのことは気にならないのに、あの同僚と親しいのが気になってしかたがありません」(三十二歳)

同じく。

「嫉妬している相手は」わたしより少し年下で、美人で、いい大学を出たお嬢様です。いったん気になりだすと、何もかも気になって、このごろは彼女の何もかもが憎くてたまりません。そして短大しか出てなくてたいした取り柄もない自分が、ほんとうに情けなく思えて苦しいです」(三十五歳)

「嫉妬」は「待つ」とかさなりあい、「待つ」とかさなりあうのが「不倫」でことで、嫉妬の相談にはやはり不倫が多うございます。

「結婚を前提につきあっている彼がいます。でも二年前に別れた別の男性のことが忘れられません。その人とは一年間ほどつきあい、けっきょく不倫という関係に耐えられずに別れましたが、あんなに心のつながりを感じて好きになった人はいません。こんなことで結婚ができるのか不安です」(二十六歳)

この人は、奥さんへの嫉妬、将来が見えないこと、人目を忍ぶことに耐えられなかったと書いていました。

ここでしとつ、不倫の本質でえことも、きつちり押さえとかなきゃなりません。

「不倫は、やっぱ特別なんです」とあたしは書いた。

あたしも、不倫してた若い頃の話ですが、あまり愛が燃えあがるんで、赤い糸だと確信してねエ、不倫だからアツくなってんじゃない、この人との愛は特別なんだって思っていましたよ。

でも、今ならわかる。不倫は不倫だから、三割増しに燃えあがるン。

妻さえいなきや文句なしの男だてんで関係をつづけていくツてえのは、アルコール依存症の男とその妻の關係に、よく似てます。「酒さえ飲まなきやいい夫」とかな、「あたしがいなきやこの人はダメになる」なんてな、支えるのはいいんだが、アルコール依存まで支えちゃうから困りものだ。

「はつきりといきましょう。しよせんは、二股かけてる相手の非であるのに、『妻さえいなければいい男なのに』と考えて、相手の、身の程をわきまえない食欲さや、ずるずるひきずる優柔不断さには、目をつぶってしまおう。その上、彼は、あなたをパートナーとして選んでません。選んでたら、不倫ってことにはなつてない。ね、現実を、直視してごらんなさい」とあたしは書いた。

嫉妬とは。

仏教のほうで、「とんじんち」ということばがございます。

漢字で書けば、貪瞋癡。

人の持つてる煩惱の基本であります。

もっと欲しいとむさぼる心、思いのままにならぬをいかる心、知ろうとしない無知の心。え、坊主の説教のようになってエますが。

その中のいかりの心、瞋しんてえやつが、つまり嫉妬と、こう考えます。そねみ、ねたみの心です。

でもね、おかしいじゃないか。

嫉妬てえのは、相手があるからしちゃうもんでしょ、しようつて思つてするもんじゃないン。自分だけがどんなに悟つてあらたまつてきちんきちんと生きていたつてエ、自分の男に女ができりや、もう否も応もなく心が乱れる。それが人間つてもんでござんしょ？ あたしらのせい

じゃないですよ。

「おいおい、おまいさんはそれだからいけねえ」って横町のご隠居に叱らいいちやいそうですが。え？ うちの大家なら何ていうかって？ あれアだめだ、生臭くって。七十近くンなつてもまだ生臭い。ふふ、だからあの人ア憎めなくって。女てえのは、そうじゃなくちゃ。

いやね、横町のご隠居さんに叱らいるまでもなく、あたしやこれでさんざんつばら苦しみましたから、考えつめまして、ええ、今じゃもう、ちゃんとかわかっております。嫉妬道てえもんがあるなら、免許皆伝。いや。嫉妬するほうじゃない、嫉妬する心を克服するほう。

で、嫉妬の本質とは。

はつきり申しあげますよオ、いいですかア、聞いておどろくな。

嫉妬の本質とは、自分とのたたかい。

自信がなくなったときに、嫉妬は起きる。あるいは嫉妬したときに自信はなくなる。

つまり嫉妬とは、自分は強くない、自分には人より価値が無いてえことを感じる瞬間なんです。

われわれアみんな、なんとか他人より強くなって、なんとかして、しとりでも多く、自分の子孫を残そうって欲望が、本能のどこかにしそんでおります。自分のテリトリーに他人がちんにゆうしてくりやね、こいつじゃまだってんで、たたかう。自分より強いやつが出てくれば、こんちきしようって思う。ええ、動物全般、ごくふつうの感情であり行動でありますよ。も、それは、生物としての、ええ、ごくふへんてきな衝動なんであります。

あたしはね、「恋愛」てえのもおんなしだと思ってます。

人を好きになる、どうかしてあの人と仲良くなりたと思う、できたらできたで一緒にいたい、離れてたら恋しいと思うその心は、しょせん「支配欲」といいますか、「自分は強い」と確

認したい心である、とそう思ってるんです。

ええ。ミもフタもございません。

え、あたくしも、以前にはここまで悟ってなかったんで、恋愛は惚れたはれただと思っただんで、いつのまにか悟りを得た。こんな女と惚れ合っ一緒になったつもり、今の夫が、ええ、気の毒でたまらない。

好きだと相手のいうことを、ききますねえ。これ買っついていわれると「はいはい」、あれ食べたいってえと「はいはい」と。女も男も。セックスしてっついていわれると、好きだからね、多少めんどくさくても「はいはい」と。子どもできちゃったらしょうがねえなと思っっても、まあ産んじやいますねえ。テキはそこを狙ってる。

産んじやっってね、忙しいから相手にね、おむつ替えて、保育園のお迎えしてっついていえば、むこうもこっちに惚れてますからねエ、「はいはい」と。こっちも、それが狙いである。

中には支配されたい人もおりまして、「ああ自分はこの人の支配下にある」というのが快感だ。これアこれで、支配欲の裏返しなんでございます。しかしそれでも、彼が自分より向こうの女をより支配したがつっているとわかったら、やはり嫉妬に苦しむでしょう。

「嫉妬」とは、他人のせいで自分の力がままならなくなったときの、いかりの感情。

自分のほうが勝つてりや嫉妬しません。相手のほうが、年が若かったりすこウしきれいだったり収入が多かったりしますと、こっちの足元は揺らいじやって、嫉妬します。心細くって、不安になって、つきつめれば、自分でものが消えてしまうような寂しさを感じるてえのは、そういうわけです。

だいぶ以前にこんな相談をもらいましたが、この話にどんびしゃりであった。

「つまらない相談ですがきいてください。一年前に離婚しました。離婚の原因は夫の浮気、その相手は銀行員でした。それ以来、どんなところで銀行員を見ても、たとえ銀行の中でも（銀

行の中には銀行員がいっぱいいます)、銀行員を見たら逃げたくなる衝動に駆られています。離婚して一年もたつのに、まだこんなことにこだわる自分が情けない」(三十代)

ぜんぜんつまらなくない、一年前にどれだけ苦しんだかが、ひしひしと伝わってくるような悩みでしたよ。

「離婚ってのは一件につき四年、と思ってください」とあたしは書いた。

四年てえのは、癒されるのにかかる時間です。離婚後一年なんてのはまだ序の口で、何にも元通りにやなっちゃいない。表向きアだいぶ落ち着いてきてエても、中のほうはまだぼろぼろで、ちよいと何かあると、ええ、銀行員を見かけたりするてえと、かさぶたがぼろりと剝がれて、また血がしみ出てきちゃうん。

「こういう痛みはいつかならず薄らぎます。痛みがあるうちは、なるだけ銀行に近寄らないのがいいのです。お金の出し入れなんて、機械やネットで済ますこともできますから、そういう手段を工夫するといいんですよ、逃げるが勝ち、急がば回れ、ちっとも恥ずかしいことじゃないんだから、どうどうと逃げ隠れしてください」とあたしは書いた。

なにしろ免許皆伝なんですから、巻物だったいただいてまして、ええ、ここにこう奥義が、書いてある。それをちよいとしらいてみますよ。

ええ。まず、人間ですから、自信はなくすもんだし、落ち込むのもあたりまえ。自分よりすぐれた人がいるのも当然のことなんですから、うらやましく思うのもしかたのないことと、抑えこまずに解放してやったほうが、よこざいます。

それができたら、あたしはあたしであると心得ること。

そのためには、ふつうの価値観からちょっとはずれてみると、よこざいます。ふつうの価値観というのは、やせて若くてきれいなほうが、太って年食ってみにくいより、良いとする価値

観ですな。

ところが無常というやつで。

昔はだれでもやせてきれいで若かったものが、時間が経つと、みんなうち揃って、太って年取ってみにくくなる。これはもうなんびとたりとも避けることはできない。

そのとき、太って年取ってみにくくなったとき、そういう価値観を後生大事に持ってエて、いつまでも自分がいちばん美しいなどと、白雪姫の継母みたようなことをいつてましても、そりや無理だ。そこで、価値観を、ちょっとずらす。その枠外に、みずからおんてる。しらきなおり、とも申します。

「あたしはあたしである」

なかなかできません。なかなかできないが、一旦できますと、これア一生ものです。

ええ、次に、別のことにむちゆうになること。

この男ないしは女との関係を、自分の中心に持ってこなきやいいんですな。いえ。できれば、の話ですが。これもまた、なかなかできませんが。あたくしの経験でいいますと、男の場合、六、七年つきあつてますと、できるようになりますねえ。

他に、もつときちんと支配欲を満たせるものをしとオつ作つとくと、たいへんよございます。

犬とかな。猫とかな。園芸とかな。子どもってのはだめです。こういう場合は使物物にならないと、最初っから考えておいたほうが、よございます。

ええ、それから、ほめられたら舞い上がって喜ぶくせをつけておくこと。どんなに嫉妬して、自信をなくして、落ち込んでも、何かほめられたらすぐ舞い上がるてえ訓練をしとけば、立ち直りが早くなる。

さらにそれから、自分の中には、なけりやいいと思うような性格が「嫉妬する」以外にもいろいろあるはずですからね、「けち」とか「せっかち」とか「だらしない」とか。「嫉妬」とは、

そういう、俗に悪いといわれている性格が数ある中のひとつである、とそう考えること。

嫉妬てのが、不倫の専売特許かてえと、そうでもない。嫉妬は、みんなの嫉妬です。結婚してるのに、夫が外でかわる女にいちいち嫉妬したという女もたくさんおります。結婚したら嫉妬しなくなった、といってる女は、たいていが「結婚して十年くらい経って関係がすごく落ち着いたときには」てえ但し書きを忘れてる連中です。

こんなメールが、やってきました。

「妻に事実でない不倫を疑われています。相手は仕事上のつきあいで、たしかに親しくはしていたのですが、妻が疑うようなことは一切なく、むしろ私の良い理解者でした。いくら説明しても妻は納得しません。今にも彼女と談判しに飛び出していきそうな妻の様子に、恥ずかしい話ですが、恐れをなしています。どうしたら疑いを晴らすことができますか」(四十五歳)

男からの相談ですけどもオ、あたしゃ免許皆伝ですから、こういうときも、どうすればいいのか、ちゃんとかわかってエます。

「妻に、『おまえこそいちばん』と心ゆくまで信じ込ませてやることです。間違っても、待たせてはいけません。待ってるうちに疑心暗鬼になり、よけいな妄想がむくむくと湧き上がっていつて、妻はとりこになりますから、ぜったいに待たせてはいけません。かえって怪しいんじゃないかと疑われようと、しつこいわねといわれようと、妻にこまめに連絡を入れ、妻を遊びに連れ出します。もちろんセックスも」とあたしは書いた。

するてえと今度ア、同じような相談が、妻からも来た。同一カップルじゃないかと疑ったほどだ。こっちの妻は、夫の携帯の盗み見から、女のメールを大量に発見したてえます。さんざん悩んだ末にとうとう夫と話し合い、「その女とはただのメル友だ、おれはおまえを愛してる」てえ言質げんちをとることもできた。しかし、心は、おさまらない。

「夫婦で飲みに行くことや夜の生活も増えましたが、切れたとは思えず不安が消えません。帰りが遅いと落ち着かず体重も落ちました。主人を信じて気持ちを切り替えるしかないのでしょうか」(四十代)

それで、あたしはこう書いた。

「そのとおり、夫を信じて心を切り替えること。それも『守り』じゃいけません。人生の、こういう局面では、つねに『攻め』であるべきです。携帯の盗み見は『守り』です。夫と楽しくデートしたりセックスしたりするのは『攻め』です」

つい忘れがちだが、嫉妬てえのは色恋だけにかぎらない。仕事や勉強の出来不出来、能力や容姿や金のあるなし。そういうのでも人ははげしく嫉妬をいたします。

「高校を卒業して、アルバイトの延長のように今の仕事に就きました。しかし同級生たちは進学して就職し、自立した女性になって差を感じます。嫉妬したり、怒ったり、そんな自分が怖く悲しいです」(二十六歳)

同じく。

「自分の容姿に自信が持てません。きれいな人を見ると、むかむかします。勉強はできたので、専門職に就きましたが、同僚や部下にちょっときれいな人がいると、憎くて憎くてたまりません。これで、ずっと辛い思いをしてきました」(四十四歳)

これも。

「ついつい自分と他人を比較してしまいます。人それぞれ能力違うし培ってきた経験や努力も違うのに、自分はいつも物足りなく感じてしまいます。これからもずっと事あるごとに、自分と他人を比べて羨ましく思ったり自己嫌悪になって落ち込んだりするんでしょうか」(三十二歳)

これもまた。

「親友に嫉妬する自分がいやです。わたしたちは学生時代からの親友で、二人とも若い頃に離婚を経験しており、支え合って生きてきました。この頃彼女は仕事で成功して、新聞にも出たりして、それを見たときのつらさは、耐え難いものでした。親友にこんないやな感情を抱く自分に耐えられません」(三十代)

「しろみさんはこんな辛い思いをしたことありますか」ってこれはどの嫉妬の相談だったか、書いてありました。

もちろんです。ただ、以前はさんざつばらしてたのに、この頃アぜんぜん嫉妬しません。

ほほ、免許皆伝、だてじゃないンで。

ここ……そうですね、十年以上。男についても、仕事の上でもすっきりしちゃって。そのうち、お釈迦様から表彰状しょうじょうじょうが送られてくるんじゃないか。

「あたしはあたし」てえのは、若い頃から自家薬籠中の、うう、なんでしたらう、胃薬か便秘薬か、医者に処方してもらわなくてもいいような、そんな薬でしたがね、持っていました。ずうツとがむしやらに持ってたんですけども、ここ十年、遠オク離れた僻地に住んで、島流しみたいな目にあってまして、現代のものは読みもしない、現代の人ともほとんど出会わない。たまたまなんか読むつてえと、なんでもかんでも、めずらしいから、おもしろいなあと思える。「あたしはあたし」だが「人は人」てえのを、人の群れから離れてみて、はじめて感じらいた。

その上あたしやこうして、いろんな悩みを聞いているでしょう。

人の悩みを日々聞いてエますと、人というものは、なにかこう、集合体である、「あたしはあたし」が集まれば「あたしたち」になるのだなあ、としみじみ思えてくる。あたしはあたしたちで、あたしは人で、と考えたら、もう嫉妬もなにもあつたもんじやございませぬ。

男は、ま、夫のことですが、いまだに、あたしから見りや、ふるいつきたくなるようないい男なんですけども、ええ、他人からみれば、ふるい落としたいような爺さんとか見えませぬ

な。そのくらいのことはわかるだけの、客観的な目が養われてきたてえことまいです、以前はなかった。この夫を、周囲の女という女が狙ってるような気がして、おちおちしてられませんでしたからねえ。

夫の、その額の後退や下腹の出具合や顔のシワや性的処理能力の減退にも、それはしみじみと感じられ、ええもうこの男は、よそでなんだかんだするような、まめさはないだろう、あたし一筋であろうと、やっと信じられるようになってきた。ざまみろつてえことであります。

そして自分自身の外見にしても、もうじたばたすることはない。

シミ、シワ、白髪と、脂肪。

「ふとったわね」なんていわれてももうびくともしません。あたしはあたしで、五十になればこのくらい当然で、見せる夫はこれでいいっていったから、いいだろうてな、自信でございます。若い頃に、こういう自信を持ったら、楽だったか、楽じゃなかったか、わからないような、期間限定の自信であります。そしてこれが嫉妬にはいたく効くんですな。